大学教育としての災害ボランティア
―「東日本大震災復興論」の開講―

Disaster Volunteering in University Education:
“Lecture on the Recovery from the East Japan Great Earthquake”

飯　　考　行*、李　　永　俊*、作　道　信　介*、
山　口　恵　子*、平　野　　潔*、日比野　愛　子*

Takayuki II, Yonjin LEE, Shinsuke SAKUMICHI, Keiko YAMAGUCHI, Kiyoshi HIRANO, Aiko HIBINO

要　旨

東日本大震災後、弘前大学では、21世紀教育科目として「東日本大震災復興論」を開講し、災害ボランティア体験３回と講義受講を要件として単位を認定した。本稿では、同講義の開講経緯と概要を紹介し、受講生に対する調査結果を踏まえて、開講目標であった「同じ東北地方で起こった災害の脅威を現場で認識し、被災者の思いに共感し、復興支援にあたるとともに、中長期的な復興策と被害再来の防止策を考えることで、社会に貢献する資質を育むこと」の達成度と、大学教育における災害ボランティアの効果を検討する。結論として、災害ボランティアは、学生の教育面で、災害の脅威の認識、被災者への共感、中長期的な復興策と被害再来の防止策の考察、社会に貢献する資質の育成と、就業力向上の点で、有益な効果を持ちうるが、災害ボランティアの教育効果を高めるためには、講義の進行やボランティアの運営などの点で相応の工夫を施す必要があることを明らかにする。

キーワード：大学教育、災害ボランティア、単位認定、社会貢献、就業力

はじめに

弘前大学21世紀教育科目として、2011年度後期に、「東日本大震災復興論」が、人文学部の李永俊、作道信介、山口恵子、平野潔、日比野愛子、飯考行の共同担当で開講された。被災地での災害ボランティア活動３回を要件とする関連講義を交えたオムニバス科目であり、災害ボランティアを正式に単位として認定した点で弘前大学では新規の試みであった。

本稿は、同講義の概要を紹介し、受講生への影響をアンケート調査結果にもとづいて検討するとともに、大学教育としての災害ボランティアの可能性に関する若干の考察を加えることを目的とする。以下で、開講経緯（Ⅰ）、講義概要（Ⅱ）、受講生の反応（Ⅲ）、災害ボランティアの教育効果（Ⅳ）の順に論述を進めていく。

＊弘前大学人文学部
Faculty of Humanities, Hirosaki University

Ⅰ　開講経緯

「東日本大震災復興論」開講の契機は、2011年３月11日の東日本大震災勃発にある。同震災による弘前市の被害は、震度４、停電一日や物資不足にとどまったものの、東北地方沿岸部は、津波および原子力発電所事故による甚大な被害を被った。弘前大学では、同震災直後から、復興支援に向けた各種の取り組みを開始したが、その一つに、人文学部教員有志による「弘前大学人文学部ボランティアセンター」（以下、センター）の活動がある。センターは、東日本大震災後の復興を大学生および教員で支援するべく、雇用政策研究センターに設置された。震災の翌月より、東日本大震災で地震ならびに津波被害を受けた被災地のうち、津波で多くの家屋が流され人命が失われた岩手県野田村を対象地として、弘前大学学生および市民から希望者を広く募り、災害ボランティアを乗せたバスを毎週定期運行し、現地で瓦礫撤去や避難所から仮設住宅への引越し手伝い等の震災ボランティア活動を行った[1]。

野田村における災害ボランティア活動では、支援活動の改善に活かすべく、帰りのバス車内で毎回アンケート調査を行い、感想を述べてもらっていた。ボランティアの感想、意見を聴取する中で、ボランティア体験が社会貢献と社会教育効果を伴うことに気づかされた。すなわち、「被災地に立ち作業し津波の恐ろしさを体感した」、「被災者に感謝されて役立てたと実感した」、「復興の方策を考えさせられた」などの声が多く寄せられ、学生間の口コミを通じてボランティア登録者数は上昇の一途を辿った。

災害ボランティアを通じて、大学生への教育効果として、被災地でボランティア活動を行うことで、同じ東北地方で起こった災害の脅威を現場で認識し、被災者の思いに共感し、復興支援にあたるとともに、中長期的な復興策と被害再来の防止策を考える、社会貢献と社会教育の相乗効果が期待できるのではないかと推測された。大震災は悲惨な出来事である一方、大学生がその惨状に触れて復興に寄与することは、社会貢献と社会教育の有益な機会でもある。被災地である東北地方に位置する弘前大学の学生が災害ボランティア活動に従事することは、大学の地域貢献でもあり、その活動はすでに地元紙で大きく取り上げられ[2]、注目を集めていた。

弘前大学では、災害ボランティアを含むボランティア活動について、2008年度入学者より、４月から１月までの期間に45時間以上実施した場合に１単位を認定する制度があったが、卒業所要単位に含むことはできなかった[3]。しかし、野田村で災害ボランティアに真摯に取り組む学生の姿からは、被災の実情に触れ、被災者の声を聞き、ボランティア参加の学生間および市民との間で協働する体験が、机上で得られない教育効果を持ちうるように映り、正式な履修単位として認められて然るべきではないかと考えられた。また、ボランティア体験のみでなく、震災復興に関する講義を組み合わせることで、いっそうの教育効果が上がることが見込まれた。

災害ボランティア体験を、関連講義を交えてその教育効果を確かなものとし、正式単位化する構想を実践に移したのが、「東日本大震災復興論」講義であった。特設テーマ科目として２単位を認定し、開講目的は、「同じ東北地方で起こった災害の脅威を現場で認識し、被災者の思いに共感し、復興支援にあたるとともに、中長期的な復興策と被害再来の防止策を考えることで、社会に貢献する資質を育むこと」におかれた。弘前大学中期目標・中期計画との関連では、人間性及び社会性を涵養する教養教育（Ⅰ1（1））および社会との連携や社会貢献（Ⅰ3（1）以下）と、教育・研究・社会貢献を通して地域における経済、産業、教育、文化などの地域との連携を推進し、地域の活性化・発展に貢献する効果が目指された。

1　弘前大学人文学部ボランティアセンターの活動の詳細は、弘前大学人文学部ボランティアセンター編（2012）参照。
2　陸奥新報2011年４月20日朝刊記事、東奥日報同年５月６日夕刊記事など。
3　弘前大学「ボランティア活動における単位認定実施要項」にもとづく。

Ⅱ　講義概要

1．編成

「東日本大震災復興論」講義は、計15回（試験時間を含めて16回）構成で、オリエンテーション（２回）後、災害ボランティア体験３回（講義９回分相当）を経て、年明けの講義（４回）の編成をとった。

野田村での災害ボランティア体験１回あたり講義３回分（４時間30分）に換算したのは、ボランティア時に、朝７時頃に弘前を発ち、10時30分頃に現地到着、１時間余り活動してから、昼食をとり、午後13時から15時頃まで活動後、15時30分に現地を出発し、19時頃に弘前に戻る場合が一般的で、行きのバス車内での事前レクチャーに30時間程度、現地活動に３時間余り、帰りのバス車内での活動振り返りに１時間余りかかり、実質計４時間30分強を要するためであった。

講義シラバスでは、オリエンテーションと、震災復興の論点と震災ボランティアの役割に関する講義を受けて、北リアス地域で震災ボランティアを体験し（大学チャーターバスに乗車して３回以上参加）、被災地の実情と復興ニーズを見聞した後、震災ボランティア体験を踏まえて、震災復興の方策を学習し、最後に震災復興の方策に関するディスカッションを行う旨が記載され、受講者が募集された。

各回の講義およびボランティアの概要は、以下の通りである。

2．概要

(1) オリエンテーション（10月７日、14日）

李により、野田村での災害ボランティア開始の経緯と、これまでの活動の概要、留意点などについて、現地活動写真や、何度も野田村に足を運んでいたセンター学生事務局有志との質疑形式を交えて、二度にわたるオリエンテーションが行われた。

開講時は、３回の野田村行きを要件とし、ディスカッションを交える進行方法をシラバスに記載したため、受講生は10数名、多くて30名程度と推測していたが、予想に反し、初回オリエンテーション時は、200名程度収容の大教室に座りきれないほどの大人数の学生がつめかけた。李より、受講に際して被災地支援に向けた真摯な気持ちが求められる旨が語られ、最終的に120名が履修登録を行った。

登録者に受講理由を尋ねると、以前から被災地の役に立ちたかったが行動に移す機会がなかったという回答が多く、潜在的な災害ボランティアへの参加意向がうかがわれた。

(2) 野田村での災害ボランティア体験（10月－１月、３回選択）

以上の受講生の多さは、担当教員にとって嬉しい悲鳴であり、３回の受講が可能となるよう、野田村行きの回数を増やし、回により複数のバスを手配する必要が生じた。野田村社会福祉協議会の災害ボランティアセンターでは、８月末に岩手県外からの災害ボランティア受入れを終了しており、個人宅の瓦礫撤去等の作業はほとんどなかったため、活動の主軸を支援から交流へシフトする時期に来ており、活動内容を工夫しなければならなかった。また、従来は現地の災害ボランティアセンターに作業内容をほぼ委ねてきたが、９月からは、自ら現地での調整を含めて支援・交流活動を企画せざるをえなくなり、講義担当教員はセッティングと交替での引率に相応の労力を要した。

受講要件となった野田村支援･交流ボランティアの活動概要は、以下の通りである[4]。参加学生の多くを「東日本大震災復興論」受講生が占めている。なお、行きのバス車内では、ボランティアの心がまえとして、「ボランティア活動における諸注意」（８月までの瓦礫撤去等の際に用いていた留意事項の改訂版、平野作成）を行きのバス車内で配布し、引率教員により解説が加えられた（添付資料１）。

---

[4] 活動の詳細は、弘前大学人文学部ボランティアセンター編（2012）および12月10日以降の記録は弘前大学人文学部ボランティアセンターウェブサイト（http://huvc.net/）掲載の各日の報告書を参照。

①支援・交流（10月15日）

「東日本大震災復興論」開講後、初の野田村訪問であった。参加者55名（内訳は、学生41名（受講生33名）、市民13名、教員１名）で、押し花教室（休業中の鍼灸医院）、ペットボトルロケット製作と打ち上げ（野田村役場前付近）、仮設住宅訪問と米配布（野田中学校グラウンド）の３グループに分かれて活動した。作業内容は、ペットボトルロケットは子どもとの遊び、押し花は弘前市の専門ボランティアが指導役を務める野田村住民との交流、仮設住宅回りは関西の日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）大学生との共同作業であった。

帰りのバス車内では、各参加者からは、総じて、楽しかった、良い経験になった、という感想が聞かれた。被災地に足を運んだこと自体が初めての学生（受講生）が多く、被災状況を目の当たりにし、被災者と相対して感じるところが多々あったことがうかがわれた。

②支援・交流（10月29日）

参加者は39名（内訳は、学生29名（受講生26名）、市民９名、教員１名）で、押し花教室（前回の継続）、ペットボトルロケット（前回同様）、仮設住宅訪問とりんご配布（野田中学校グラウンド）、写真撮影会・アルバムカフェのサポート（野田総合センター）の４グループに分かれて活動した。後２グループは、午前中に共同で仮設住宅訪問（泉沢地区）を行い、りんごを配布した。

今回配布したりんごは、市民ボランティアの知り合いの農家より無償提供を受けた200個であった。写真撮影会・アルバムカフェのサポートは、チーム北リアス（野田村支援・交流の広域ネットワーク）のメーリングリストで、活動予定日に、東北地方の写真館経営者約70人からなる東北パイオニアグリーンサークル（東北PGC）の企画で、弘前市の写真店主が無料撮影会とアルバムカフェ（写真をスクラップブックに切り貼りする交流作業）を行うことが分かり、サポートさせていただく運びとなった。

帰りのバス車内では、前回に続いて押し花に参加した学生から、「今回は自分から地元の人に話しかけることができるようになり、我ながら成長したなと感じた」と語られた。仮設住宅を訪問した学生からは、「津波で流された場所には行きたくない」と言われていまだに大きな傷跡になっていると感じた、心に穴の開いたような寂しい気持ちになった、津波の話に戸惑ったが聞いてあげることも大事だと思った、りんごをあげて「すみません」と言われた時は複雑な気持ちになった、もう一度野田村の方の心と感じ方を考えたい、打ち解けた雰囲気が作れず会話があまりできなかった、などの声があった。写真撮影会・アルバムカフェサポートを行った学生からは、保護者や子どもの笑顔を見ることができて嬉しくなった、とても良い取り組みと思ったなど、好意的な感想ばかりで、「子供の相手をしてもらい助かると母親に言われて、子どもと一緒にいるストレスが震災で増しているのかもしれないと思った」との声もあった。

③野田村・弘前交流登山会（11月５日）

野田村の住民有志と一緒に野田村近隣の山を登る企画で、初めて野田村に赴く「東日本大震災復興論」受講生にとって参加しやすい内容であったためか、多くの参加者があり、バス３台で赴いた。弘前からの参加者は98名（内訳は、学生80名（受講生56名）、市民16名、教員２名）と、活動開始以来最大であった。

学生は、三々五々、おしゃべりを楽しみながら元気いっぱいに歩くとともに、長い行列のあちらこちらで、野田村の皆さんとおしゃべりをしたり、お荷物をもってあげたりと、一緒に歩くことが実感できる雰囲気になってきた。

帰りのバス車内では、「きつかったけど忘れられない思い出ができた」「楽しかった」という学生の感想が多く、「弘大の学生の親切さに感心した」という市民参加者からの賞賛の声も多く聞かれた。

④「復興食堂」支援（11月20日）

参加者は84名（内訳は、学生73名程度（受講生58名）、市民11名程度、教員２名）で[5]、バス２台で野田村へ向かった。様々な被災地でイベントを開催する復興食堂実行委員会による「復興食堂」が野田村で開催される情報を得て、センターでサポートする運びとなった。活動内容は、押し花教室（復興食堂)、松ぼっくりツリー制作（復興食堂)、リンゴ400個・リンゴジュース・靴下（弘前市民の手編み）の配布（復興食堂)、仮設住宅への物資の配達（野田村内の５地区の各仮設住宅)、その他復興食堂運営サポートの５グループに分かれて活動した。押し花教室と松ぼっくりツリー制作は総合センター室内で、リンゴ配布等は外のテントで行われた。

「復興食堂」で配布したりんごは、弘前大学農学生命科学部藤崎農場の厚意により提供を受けた400個（ふじ、こうこう各200個）で、あわせて頂戴したビニールカゴに入れて２個ずつ配布した。押し花教室は上記の市民ボランティアが講師役となり、松ぼっくりツリーの材料も市民ボランティアから提供を受けた。仮設住宅へ配達した物資は、新潟中越地震で被害を受けた新潟県小千谷のグループからチーム北リアスに届いた野菜や米であった。

学生ボランティアは、復興食堂および仮設住宅で好意的に受け入れられ、帰りのバス車内は充実感に溢れた感想で一杯となった。「野田村の人とたくさん話ができた」、「村の人がみんな笑顔で、自分も一日中笑顔でいられた。こんなの久しぶりで、こちらの方が元気をもらった」、「いつもありがとうと言われ、今までの活動で積み上げてきたものがどれだけ大きかったかを実感した」、「以前瓦礫を撤去したところで子供が楽しそうに鬼ごっこをしていて、自分の活動が役に立っていたんだと思えて嬉しかった」などの声が聞かれた。

⑤現地体験学習会（12月３日）

参加者は49名（内訳は、学生39名（受講生37名）、市民８名、教員２名）で、津波で破壊された海岸の様子を見学した後、野田村のえぼし荘で野田村復興支援特別授業に参加した。「東日本大震災復興論」受講生には、今回か次回（12月10日）かいずれかの受講が推奨されていた。

特別講義は、「災害ボランティアの16年」と題する渥美公秀教授（大阪大学、NVNAD 理事長）の講話、野田村出身の貫牛利一氏の講話を聞き、昼食後は、足湯とツリー作りに分かれ、仮設住宅の被災者も招聘した。また、作道と山口による「訪問マナー教室」と、矢守克也教授（京都大学）と神戸の震災語り部の方による阪神淡路大震災の語りが行われた。

⑥現地体験学習会（12月10日）

参加者数は63名（内訳は、学生51名（受講生40名）、市民９名、教員３名）で、前回同様の特別授業への参加（39名)、弘前市内の小学生が作った弘前を紹介するパンフレットを仮設住宅に届ける作業と（９名)、側溝の清掃作業（15名）の大きく３つのグループに分かれての活動となった。

特別授業は、前回とほぼ同じ形式と内容で、３つの講義と足湯の実習で、最初に、渥美教授による災害ボランティアの16年間の講話、次に、貫牛氏による野田村の概要と村づくりの基礎になった活動についての講話、そして、河村信治教授（八戸工業高等専門学校）より、まちづくりの意義と実践についての講話が行われた。午後は、永田素彦准教授（京都大学）による足湯講習会が行われた。

帰りのバス車内で、特別授業に関しては、「野田村の方々と交流ができなかったのが残念でしたが、講義や足湯は勉強になることが多かったので、次の機会に活かしたいと思います」という感想が多かった。また、「渥美先生のお話の中で被災者に寄り添うことが大切だとお話されました。これからボラン

[5] 11月20日の回は、バス２台に分かれたこともあって人数チェックが行き届かず、内訳の学生と市民はエントリー時の人数を記載したが、うち２名が当日欠席している。

ティアをやっていく上でとても良いお話で、次からも機会があれば参加したいです」との声もあった。仮設住宅で弘前のパンフレットを配った学生からは、「この間作った松ぼっくりツリーをとても気に入っているということで、玄関に飾ってくれている人が結構いらっしゃったので、とてもうれしかったです。今後も野田村の人が喜んでくれることができたらなと思いました」などの感想が聞かれた。

⑦HOPE TREE製作（12月17日）

急遽の募集で、参加者は21名（内訳は、学生14名（受講生11名）、市民５名、教職員２名）であった。クリスマスイベントに向けて、クリスマスツリーの飾り（オーナメント）を作成した。

活動は、東京の「月島アートスクール」の呼びかけによるもので、野田村生涯学習センターの２階で行われた。弘前の市民ボランティア主催で、押し花を用いたクリスマスカード作りが始まり、続いて月島アートスクールの方の主催で、クリスマスツリーに飾る白い花を皆で作成した。

事前連絡の関係で、野田村の方からの参加人数がとても少なく、帰りのバスの感想の中でも、「楽しかったけれども、交流ができなかったのが残念」という声が多く聞かれた。

⑧「楽しいクリスマス会」支援（12月24日）

クリスマスイブ当日だったこともあり、参加者は26名（内訳は、学生21名（受講生18名）、市民３名、教員２名）にとどまった。クリスマスツリーの飾りつけと、弘前からのクリスマスプレゼントを贈る活動を行った。段ボール８個分くらいの山のようなプレゼントは、弘前市民参画センター、社会福祉法人抱民舎、「ハンサムウーマン」などが主体となって集めたものと、今回の活動参加者が持ち寄ったものであった。

帰りのバス車内では、「今回はプレゼントだけでなく、元気もあげたいと思ってきました」、「ありがとう、って言われるだけで、こんなにうれしいんだって思いました」、「今回子どものかわいさを再認識して、連れて帰りたくなりました」などの声があった。他方、子どもとゲームなどで遊ぶ準備をしていればよかった、外から見ると何をやっているか分かりにくかったので看板があるとよかった、プレゼントに少し偏りがあった、歌が中途半端だった、もう少し企画を練った方がよかったなど、いつになく反省が多く、子どもたちや野田村の人々にもっともっと喜んでもらいたい、という参加者の気持ちの表れのように思われた。

⑨「小正月行事なもみ」支援（１月15日）

参加者は43名（学生 29名（受講生24名）、市民 ９名、その他 ４名、教員１名）で、小正月イベント「小正月行事なもみ」のサポートを行った。この日の活動は、配給するお餅袋詰めやもちつき、どんと焼の片付け等の手伝いで、その他時間は野田村の方々とイベントに参加させていただいた。

上記の行事は、野田村役場の主催によるもので、どんと焼き、ご祈祷、もちつき、だんごしばづくりなどの新年を感じさせる内容のほか、地元の方々によるアトラクションもあった。前半のご祈祷は、昨年亡くなった方々へ深い祈りを捧げる時間となり、後半のアトラクションでは、地元の方々による伝統の踊りが披露され、野田村の着実な復興を感じさせる賑やかな雰囲気であった。

帰りのバス車中では、「野田村の方々の笑顔に逆に元気づけられた」という感想が多く寄せられた。

⑶ 講義

①土岐司「顔の見える支援」（１月６日）

白神山地のツアーガイド事業などを行う（有）エコ・遊の代表である、土岐司氏の講義が行われた。土岐氏は、このたびの震災後にいち早く野田村に入り、支援・交流活動を継続してきた。その活動を通しての生の経験や住民の声、支援のあり方等について、80分近く講演が行われた。「支援物資」というけれどもモノだけでは満たされないことに早くに気づき、食べれることがもっとも人間の尊厳を守るこ

と、フィフティな立場で一緒に作って一緒に食べること、そうした「食べにけーしょん」の意義についての話があった。また、これまで地域には力を出し合って生きてきた遺産があり、それを「生活遺産」と呼ぶことで、その意義を訴えた。受講生は、真剣なまなざしで話に聞き入っていた。大半の受講生は野田村に足を運んだ経験があるが、土岐氏のような、住民に密着したからこそ見えてきたリアリティや顔の見える支援のあり方は、興味深かった様子であった。今後の被災地支援の方向性のみならず、人と人のあるべき生き方についても学ぶことが多かったと考えられる。

②作道信介「防災ゲームを用いた災害対応の検討」（１月20日）

防災ゲーム「クロスロード」を用いた演習を実施した。クロスロードは、阪神大震災で関係者が直面したジレンマ体験をもとに作成されたカードゲームである。このゲームのねらいは、災害対応を自らの問題として捉え、さまざまな意見・価値観を参加者同士で共有することにある。授業の前半では、受講生が５名ずつのグループに分かれ、クロスロード（災害ボランティア編の中から10事例）によるゲーミング演習を行った。授業の後半では、各グループで、印象的だった２つのジレンマ状況を選択し、特定の選択を取ることのメリット、デメリットや、そのジレンマをどのように解決できるか、グループ討議と全体での発表を行った。受講生は、グループ演習を通じ、ボランティアに関わるさまざまな経験を振り返りつつ、問題や今後の方向性を考察できた。

③成田春洋「対人支援ボランティアとして必要な視点について」（１月27日）

野田村災害ボランティアの常連で、弘前市内で社会福祉法人の代表を務める成田氏による講話で、成田氏のフィールドである福祉の現場での障害者、高齢者への接し方とその留意点を中心とする内容であった。主な対象は福祉分野であったが、被災者への接し方、ひいては対人関係一般にも通じることが語られ、学生は静かに聴き入っていた。

野田村の仮設住宅訪問時に、高齢者の被災者から「私は震災の時に津波で流されていればよかった」と言われて戸惑ったがどう答えれば良かったかという質問に対して、成田氏は、その方の話に耳を傾けることが重要であり、誰しもが持っている過去の誇れること（宝物）を話してもらうことを、一例としてアドバイスした。

④渥美公秀「災害ボランティアの17年を考える」（２月３日）

最終回に、2011年12月の野田村現地学習会で講師を依頼した渥美教授に再登場していただいた。

まず、災害ボランティアについて、その歴史を踏まえて、被災者の傍にいることが大切であるとされた。しかし、その活動は、秩序化のドライブと遊動化のドライブのせめぎあいの場で、阪神・淡路大震災時は遊動性に満ちていたが、その後の標準化の要請の中で東日本大震災では初動が遅れたことが指摘された。そして、遊動化のドライブを活性化させるための方策として、原点回帰や活動の拡張によって秩序化のドライブに対抗する試みと、遊動性を帯びた状況を社会のあちらこちらで発生させる試みが、事例を交えて紹介された。受講生は、ユーモア交じりの話術に誘われて自身の活動に照らして渥美教授の分析に興味を抱いたようであった。

Ⅲ　受講生の反応

「東日本大震災復興論」受講生が、野田村でのボランティアを含む講義にどのような反応を示したかを、講義終盤（2012年１月27日）の受講生アンケート集計結果（以下、受講生調査）と、ボランティアセンターでのボランティアに対する意識調査結果（以下、ボランティア意識調査。本稿では受講生と推測される者59名の回答部分を抜き出したものを用いる）から検討する。

受講生調査は、2012年１月27日の講義終了時に質問票（添付資料２参照）を配布し、無記名で記載を求め、その場で回収する方法で行われた。開講目的である「同じ東北地方で起こった災害の脅威を現場で認識し、被災者の思いに共感し、復興支援にあたるとともに、中長期的な復興策と被害再来の防止策を考えることで、社会に貢献する資質を育むこと」の達成度をはかる７項目の問を設定し、無記名回答を求めた。ボランティア意識調査は[6]、ボランティアセンター登録者の中で、一回以上、弘前大学主催のボランティアに参加した市民・学生の方々を対象に、2011年11月から12月にかけて行われた。調査方法は質問紙法で、社会人は郵送法、学生は集合法に加えて参加学生への個別の配布も行った。

以下で、受講生調査の「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答比率と、ボランティア意識調査の「非常にあてはまる」「ややあてはまる」の回答比率から、受講生の反応を概観する[7]。

受講生の属性は、ボランティア意識調査に関連設問の問１、２があり、３割ほど（32.2％）が被災地域出身者で、他方、被災地域と特に関わりのない者は３割ほど（30.5％）いる。９割弱（88.1％）が震災に関する報道を繰り返し見ており、４割ほど（40.7％）がショックで眠れず、５割強（57.6％）は現実感覚が麻痺し、７割程度（72.9％）が何もできないことに悶々とし、６割ほど（61.0％）が何かできることはないか探していた。東日本大震災が学生の心理におよぼした影響力の大きさをうかがい知ることができる。問12、13の回答結果によれば、別の災害ボランティア経験者は多くないものの（13.6％）、災害ボランティア以外のボランティア活動には約半数（50.8％）が参加経験を持っていた。

災害の脅威の認識に関しては、受講生調査の問１「震災は恐ろしいと思うようになった」が94.1％、問２「被災者は大変であると思うようになった」が90.6％で、講義を通じた認識の深まりが認められた。ボランティア意識調査の問10－４と10－７でも、８割程度の回答者が同様の回答を行っている。

被災者の思いへの共感は、受講生調査の問３で８割強（85.9％）が肯定回答となった。問１、２と比較して若干比率が低い理由には、受講生が参加したボランティアの態様により被災者と交流する機会が多くなかったことが挙げられよう。

復興支援の有効性の点は、問４「被災者の支援に役立てたと思うようになった」で54.1％であった。この回答結果は、３回にとどまるボランティア経験のみでは、役立てたという実感を持ちにくいことを表しているように思われる。ボランティア意識調査の問10－６でも、６割強（62.7％）が自分の無力を感じたと回答している。

中長期的な復興策と被害再来の防止策を考えたかどうかについては、受講生調査の問６「災害復興の方策を考えるようになった」で８割強（83.5％）が肯定的に回答している。東日本大震災復興論では、講義回数の関係もありかなわなかったが、震災復興に関する行政立法施策を扱うことができれば、さらに回答率が上昇した可能性もあろう。ボランティア意識調査では、問14－６によれば野田村のことをよく考えるようになった者が８割程度（79.5％）おり、問14－７によれば行政の取り組みに関するニュースに７割強（74.6％）が気を留めるようになった。

社会に貢献する資質の育成の関連では、受講生調査の問５「地域への貢献について考えるようになった」に９割弱（88.3％）が肯定している。ボランティア意識調査の問15－１、15－２でも、７割程度（69.5％）が地元に対する愛着が増え、６割強（62.7％）が地域の行事に関心を持つようになったと回答している。また、問14－８によれば節電や募金など身近な協力に８割弱（78.0％）が心がけるようになった。

受講生の資質全般では、受講生調査の問７「自分の人間性、社会性が向上したと感じるようになった」について、３人に２人程度（64.7％）が肯定している。ボランティア意識調査の問14－10によれば自分の気づかなかった力に気がついた人が半数強（54.0％）となっている。その他に、同調査の問

6　ボランティア意識調査の実施者は、作道、日比野、山口、李で、2012年３月上旬に調査報告書（弘前大学人文学部ボランティアセンター編「災害ボランティア活動に関する意識調査報告書」）が刊行されている。

7　両調査は厳密には調査時期と手法が異なるものの、本稿では、講義目標の達成度をはかる見地から、ともに資料として用いる。なお、受講生調査の方が若干肯定的な回答が多いように見受けられる。

10－4によれば7割強（72.8％）が災害ボランティアにやりがいを感じ、問10－8によれば8割弱（78.0％）が共同作業の喜びを感じている。問14－2、14-14によれば、同年代以外の人と喋りやすくなり、色々な人と働くことへの不安が軽くなった受講生が半数程度見られる。

以上をまとめれば、開講目的のうち、災害の脅威の認識、被災者への共感、中長期的な復興策と被害再来の防止策の考察、社会に貢献する資質の育成は、おおむね達成されたと言えよう。ただし、講義およびボランティアの回数と内容改善をはかることにより、さらに達成度が高まった余地はあろう。

Ⅳ　災害ボランティアの教育効果

(1) 全国の状況など

災害ボランティアは、阪神・淡路大震災後に注目を集め、大学生によるボランティア活動もなされた[8]。東日本大震災後は、「ボランティア元年」と称された上記の阪神・淡路大震災時の経験が活かされ[9]、災害ボランティア活動が行われ、弘前大学に限らず、全国の多数の大学内にボランティアセンターが設置され、大学サークルによる被災地での支援活動が展開された[10]。

東日本大震災後、文部科学省は、2011年4月に、全国の被災地支援の動きを後押しするため、全国の国公私立大学に対し、学生が東日本大震災の被災者支援ボランティアに参加した場合、その活動を大学の単位として認めるよう要請した[11]。

この国からの要請を受けて、毎日新聞の調査で、約4割の大学が災害ボランティアを単位認定する旨を回答している[12]。同調査によれば、大半は、事前講義と30-60時間程度のボランティア、事後のリポートを組み合わせ、1－2単位を与える内容で、認定の理由（自由記述）については、単位を認定する大学の72％にあたる23校で教育的効果への期待を挙げ、「自主性、積極性などの資質を養う」（長岡技術科学大）、「社会の一員であることを自覚し社会連携の理念について認識を深める」（鹿屋体育大）と回答した。復興支援に言及したのは5校で、福島大は「ボランティア参加を後押しすることで被災地支援につなげる」、東京大は「社会的公共性を有する総合大学として復興支援は責務」と強調した。単位認定しないとした51校のうち13校は「自発的行為に単位を与えるのは違和感がある」（宮城教育大）など、無償のボランティアと単位を結びつけることに抵抗があることを理由に挙げた。単位認定の可否をめぐり全国で意見が分かれていることが分かる。

災害ボランティアの教育効果は、本稿で記述した通り、災害の脅威の認識、被災者への共感、中長期的な復興策と被害再来の防止策の考察、社会に貢献する資質の育成について認められた。災害ボランティアに赴くのみではなく、「東日本大震災復興論」のように講義を加味することで、単位認定への道が開きやすいのではなかろうか。

東日本大震災の被災地に駆けつけた大学生ボランティアに対する2011年12月調査によれば[13]、回答した445人のうち9割が初参加で、ほとんどの学生が活動に満足し、今後もボランティアを続けたいと回答し、同新聞記事は、大規模な災害が学生たちの意識を目覚めさせたことをうかがわせたと分析する。回答者の9割が「満足感を得られた」と答え、「再び行こうと思う」「新たな災害があった場合に行こう

---

8 災害ボランティアに関する概説は菅他編（2008）、矢守・渥美編著（2011）第3部、甲南大学の学生災害ボランティアの事例につき藤本・森田編（1996）、京都経済短期大学の事例につき、京都経済短期大学・職員研究会編著（2009）を参照。

9 新（2011）は、両震災の違いとして、被災範囲とボランティア活動の「専門家」の存在を挙げる。

10 大学による災害ボランティア活動記録の一例として、多田孝文監修・渡邊直樹責任編集（2011）、中原（2011）の石巻専修大学の事例を参照。

11 文部科学省は、あわせて、各大学に、ボランティア活動を単位認定すること、ボランティア活動のため休学する学生についてその間の授業料を免除すること、保険に加入してケガなどに備えるよう学生に周知徹底することを求めた。

12 毎日新聞2011年11月7日朝刊記事による。アンケートは、同年9月から10月にかけて、全国86の国立大学を対象に実施され、83校から回答があり、うち32校が単位を認めていた。

13 朝日新聞2012年1月14日朝刊記事による。なお、このアンケートの回答には弘前大学生も協力した。

と思う」もそれぞれ９割を超えたという。

大学生にも災害ボランティア体験は概して好評であるが、大学における災害ボランティアの実践には課題もある。弘前大学の「東日本大震災復興論」の実践に明らかであるように、復興イベント等では関係機関の連携協力が欠かせない。事故に備えて、ボランティアに際しての留意事項の周知徹底や、ボランティア保険への加入も必須となる。今後は、大学でいかなる組織形態、マンパワーをもって災害ボランティアに取り組みやすい環境整備をはかるかが課題であろう。なお、本稿では大学における災害ボランティアに焦点をあてたが、高校生等にも有益な効果を期待できよう[14]。

(2) 就業力の向上効果

次に、ボランティア意識調査の結果を用いて、ボランティア活動の教育効果を検討する。文部科学省は2011年に、厳しい雇用情勢において、新卒学生の就職率の向上、学生の資質能力に対する社会からの要請や、学生の多様化に伴う卒業後の就業生活等への移行支援の必要性から「大学生の就業力育成支援事業」を実施している。ここでいう「就業力」については明確な定義はないが、福岡県立大学では「幅広い就業人としての職業開拓力および社会的強み（社会貢献力）を兼ね備えている力」と定義している。

また、就業力の構成要因として「創造的思考力」「総合的学修力」「自己理解力」「コミュニケーション力」「ストレス耐性力」「キャリアデザイン力」「計画的学修推進力」「職業観・勤労観力」の８つを挙げている。以上の力がボランティア活動を通してどのように養われているのかを見てみよう。

まず、自己理解力について検討する。自己理解力が自分の適性を正確に理解し、正しい就業選択において必要不可欠な能力であろう。意識調査では「自分のできることについて、これまで気づかなかった「力」に気がついた」という質問に、54.2％の受講生が「ややあてはまる」「非常にあてはまる」を選択しており、ボランティアを通して自己への理解力が高まったことを示唆している。また、「色々な人と働くことへの不安がかるくなった」という質問に、52.5％の受講生が肯定的な回答をしており、自己理解と就業への不安が少し取り除かれていることがうかがわれる。

本授業で行ったボランティア活動は市民との協働で行うことを原則としていた。そのため、市民とのコミュニケーションが自然と取れ、最近の大学生の不足しているスキルを育む良い機会となっていた。コミュニケーションスキルの中でも、大学の一般教育において養うことが困難であると思われる同年代以外の人とのコミュニケーションスキルを育むことができていた。意識調査では「同年代以外の人とも喋りやすくなった」という質問に対し、57.2％の受講生が喋りやすくなったと答えており、市民との協働で行ったボランティア授業の教育効果が明らかになった。

最後に注目されるのは、職業観と勤労観力である。また、地域に必要な人材を育成する「地方」大学の役割として「地元」意識の変化も注目に値する。意識調査では「普段やったことのない仕事や作業をすることができた」という質問に、84.8％の受講生があてはまると回答しており、仕事への理解と未知の仕事経験ができたことが分かる。54.2％の受講生は、今回のボランティア活動を通して「働くことや就職に関心を持つようになった」と答えており、就業観・勤労観をもつきっかけを本講義が提供していたことが分かる。

また、地元意識に関しては、「地元で働くことに興味を持つようになった」という質問に、50.9％の受講生があてはまると答えており、地元での就業に関心を持つきっかけとなったことが分かる。そして、「働く場所として、民間ではなく、NPO活動にも興味を持つようになった」という質問に対し、40.7％の受講生が興味を持つようになったと答えている。このことは、地元での就業選択を幅を広げ、地元就業確率を高めることが期待される。また、厳しい財政状況の中、年々縮小している地方の行政サービスの隙間を埋めるために必要不可欠な、NPOや市民活動を活性化するためにも重要な意義を持つ。

---

[14] 高校における災害ボランティア活動の一例として、諏訪（2011）参照。

おわりに

　本稿では、弘前大学で2011年度後期に開講した21世紀教育科目「東日本大震災復興論」について、同講義の開設経緯を含む進行概要を紹介し、受講生の反応をアンケート調査結果にもとづいて検討するとともに、大学教育としての災害ボランティアの可能性に関する若干の考察を加えた。

　災害ボランティアは、学生の教育面で、災害の脅威の認識、被災者への共感、中長期的な復興策と被害再来の防止策の考察、社会に貢献する資質の育成、および就業力向上の点で、有益な効果を持ちうる。ただし、災害ボランティアの教育効果を高めるためには、講義の進行やボランティアの運営などの点で、相応の工夫を施す必要がある。以上が、本稿の主な知見である。

「東日本大震災復興論」講義の担当教員にとって、東日本大震災後は、災害ボランティアの教育効果を含めて、大学と地域の関係を考えさせられることの多い一年であった。私たちの教育の試行は、そのつど対応を迫られる中で続けたものに過ぎないが、災害に関連した教育のあり方を考える上で何らかの材料を提供できたのであれば幸いである。2011年度の試行を踏まえて、2012年度も、弘前大学の21世紀教育科目において、内容を刷新して新たな「東日本大震災復興論」を展開することを検討している。

　最後になるが、本稿執筆に際して、弘前大学人文学部ボランティアセンタースタッフの会津理佳子さん、石岡学さんに、ボランティア参加者名簿の確認作業等でお世話になった。また、学生事務局を務める在学生には、ボランティアバスを運営する上で毎回ご助力いただいた。感謝申し上げたい。

＊本稿は、平成23年度弘前大学教育支援経費「震災ボランティア体験と復興支援策の学習を通じた学生の地域貢献力の育成」による成果の一部である。

文　献

新雅史「災害ボランティア活動の「成熟」とは何か」遠藤薫編著『大震災後の社会学』（講談社、2011）193-235頁

京都経済短期大学・職員研究会編著『大学教育と地域社会』（晃洋書房、2009）

菅磨志保・山下祐介・渥美公秀『災害ボランティア論入門』（弘文堂、2008）

諏訪清二『高校生、災害と向き合う―舞子高等学校環境防災科の10年』（岩波書店、2011）

多田孝文監修・渡邊直樹責任編集『3.11大震災　大学には何ができたのか』（平凡社、2011）

中原一歩『奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」』（平凡社、2011）

弘前大学人文学部ボランティアセンター編『チーム・オール弘前の一年―岩手県野田村の復興支援・交流活動の記録―』（弘前大学出版会、2012）

藤本健夫・森田三郎編『阪神大震災の記録1　甲南大学の阪神大震災』（神戸新聞総合出版センター、1996）

矢守克也・渥美公秀編著・近藤誠司・宮本匠著『防災・減災の人間科学―いのちを支える、現場に寄り添う』（新曜社、2011）

資料１

ボランティア活動における諸注意

◆**ボランティア活動は、基本的には自主的な活動です。自己責任・自己完結**でお願いします。

◆野田村で作業をするときは、**つねにグループで行動し、グループのリーダーの指示に従って**ください。また、**全体で行動する際には、事務局の指示に従って**ください。くれぐれも**勝手な行動をとらないように**お願いします。

◆ボランティアと言っても出来ることと出来ないことがあります。**自分には出来ないと思ったことは、はっきりと断りましょう。**無償のボランティアでも「出来る」「やります」と言ったことには責任が発生します。**断る勇気も大事です。**

◆**体調管理は、自己責任です。**各自で判断して、**適度に休憩を取ったり水分を補給したり**しましょう。そして、**具合が悪い時は無理をせず、勇気をもって休みましょう。**

◆被災地では、ボランティアを語った窃盗事件が発生しています。野田村の皆さんが疑心暗鬼にならないよう、**ネームプレートを付け、「弘前大学人文学部」のユニフォームを着て活動しましょう。**また、**身分証の提示を求められたら、速やかにネームプレートを提示して、自己紹介をしましょう。**

◆**つねに挨拶を心掛けましょう。**野田村に着いたときだけでなく、活動場所への移動の際、活動中など、被災地の方々、一緒にボランティア活動に携わっている方々にしっかりと挨拶をしてください。挨拶が心と心を繋ぎます。

◆**自分の持ち物については、各自でしっかり管理をするように**してください。活動場所に忘れ物をしたり、あるいは不用意なところに放置して窃盗の被害に遭ったりするようなことがないようにお願いします。

◆現地では、仲間たちに報告するため、写真を撮ることもあるかと思います。しかし、そこは野田村の皆さんの空間になります。**原則として被災者、倒壊した家、仮設住宅を撮影したり、現地でボランティアの集合写真を撮ったりすることは極力控えてください。**また、**被災地での不用意な発言にも気を付けましょう。**

◆**ゴミは必ず持ち帰るようにしてください。**被災地は災害ゴミであふれかえっています。ゴミを持ち帰ることも大切なボランティアです。

◆**ボランティア活動は、「援助活動」というよりも、「交流活動」といえるもの**です。「してあげる」「やってあげる」ではなく、「させてもらう」「やらせてもらう」くらいの気持ちが必要です。**相手を被災者としてみるのではなく、対等な人間として、「私に何かやらせてください」という気持ちで臨みましょう。**

◆交流活動では、ガレキ撤去活動と異なり、あまりボランティアをしたという実感を得られることがないかもしれません。また、初めて活動に参加する際には、思い描いていた活動とのギャップを感じることがあるかもしれません。場合によっては、予定していたイベントにほとんど参加者がいないということもあります。しかし、**現在のボランティア活動で必要なことは、私たちが継続的に野田村に通っているということ、「いつも野田村の皆さんのことを気に掛けていますよ」「皆さんは一人じゃありませんよ」ということを、野田村の皆さんに認識してもらうこと**です。つまり、**野田村に行くこと自体が大事なボランティア活動**なのです。そのことを忘れずに活動をしてください。

◆１回だけの活動では出来ることが限られます。また、１回だけでは見えないこともたくさんあります。**長期的に野田村の皆さんと付き合うつもりで活動してください。**ただ、自分の出来る範囲を超えてボランティアに参加する必要はありません。出来るだけ長期的に活動に参加するためにも、一時的に無理をするのはやめてください。各自の時間・力を少しずつ出し合って、復興に関わっていきましょう。災害ボランティアの目的は、被災した住民が一日でも早く自立した生活が送れるよう被災者が望むことをお手伝いすることです。**野田村の皆さんと一緒に復興をめざしましょう。**

◆**被災された方の言葉に耳を傾けてください。**被災者の中には、自分の経験したことを誰かに聞いてもらいたいと思っている人もいます。活動予定が多少遅れても構いませんので、被災者が話してくださる話を真摯に聞いてください。それも大事な交流ですし、ボランティアです。ただ、中にはあまり語りたくない方もいるでしょうから、話したくない素振りをされているのに、こちらから根掘り葉掘り聞くことは慎んでください。

◆基本は、**人間としてやってはいけないことは慎みましょうということです。**そうでなければ、思いやりがあれば、ボランティア活動はどんなことでもOKです。

◆現地では、依然として**余震・津波の危険**があります。十分に注意して活動し、何かあった場合には、**関係者の注意等に従ってください。**

資料２

東日本大震災復興論　受講生アンケート　2012年1月27日

＊回答集計結果は、今春発刊予定の学内誌「21世紀教育フォーラム」に掲載予定です。

あなたは、この講義を通じて、受講前と比べて、以下の点をどのようにとらえるようになったか、それぞれ記して下さい（〇は一つずつ）

＊「講義」には、受講要件の野田村での災害ボランティア・交流・学習活動を含みます。

１．震災は恐ろしいと思うようになった

①そう思う　②どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　④どちらかといえばそう思わない　⑤そう思わない

２．被災者は大変であると思うようになった

①そう思う　②どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　④どちらかといえばそう思わない　⑤そう思わない

３．被災者の思いに共感するようになった

①そう思う　②どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　④どちらかといえばそう思わない　⑤そう思わない

４．被災者の支援に役立てたと思うようになった

①そう思う　②どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　④どちらかといえばそう思わない　⑤そう思わない

５．地域への貢献について考えるようになった

①そう思う　②どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　④どちらかといえばそう思わない　⑤そう思わない

６．災害復興の方策を考えるようになった

①そう思う　②どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　④どちらかといえばそう思わない　⑤そう思わない

７．自分の人間性、社会性が向上したと感じるようになった

①そう思う　②どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　④どちらかといえばそう思わない　⑤そう思わない

以上で質問は終了です。ご協力いただきありがとうございました。

資料３

「東日本大震災復興論」受講生アンケート結果

（2012年１月27日実施、回答者85名）

■【Ｑ１】震災は恐ろしいと思うようになった <SA>

	全　体	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
調 査 数	85	59	21	4	1	0
構成比率	100.0	69.4	24.7	4.7	1.2	0

■【Ｑ２】被災者は大変であると思うようになった <SA>

	全　体	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
調 査 数	85	58	19	6	2	0
構成比率	100.0	68.2	22.4	7.1	2.4	0

■【Ｑ３】被災者の思いに共感するようになった <SA>

	全　体	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
調 査 数	85	43	30	9	2	1
構成比率	100.0	50.6	35.3	10.6	2.4	1.2

■【Ｑ４】被災者の支援に役立てたと思うようになった <SA>

	全　体	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
調 査 数	85	14	32	26	11	2
構成比率	100.0	16.5	37.6	30.6	12.9	2.4

■【Ｑ５】地域への貢献について考えるようになった <SA>

	全　体	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
調 査 数	85	35	40	7	2	1
構成比率	100.0	41.2	47.1	8.2	2.4	1.2

■【Ｑ６】災害復興の方策を考えるようになった <SA>

	全　体	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
調 査 数	85	32	39	9	3	2
構成比率	100.0	37.6	45.9	10.6	3.5	2.4

■【Ｑ７】自分の人間性、社会性が向上したと感じるようになった <SA>

	全　体	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
調 査 数	85	25	30	26	4	0
構成比率	100.0	29.4	35.3	30.6	4.7	0

資料4

災害ボランティア活動に関する意識調査結果（抜粋*）

（2011年11-12月実施、質問票作成者：作道信介、日比野愛子、山口恵子、李　永俊）

* 意識調査の有効回答者数191名中、「東日本大震災復興論」受講生と推測される（ボランティアセンター登録の契機の選択肢で「弘前大学の特設講義をきっかけとして」を挙げた）59名について、主な質問回答を抜粋した。

■【Q1】東日本大震災での被災地域との関わり <MA>

	全　体	被災地の出身である	出身ではないが、被災地域に住んだことがある	被災地に知り合いや友人がいる	旅行や仕事で、被災地を訪れたことがある	特に関わりはない	その他
調 査 数	59	19	1	26	13	18	0
構成比率	100.0	32.2	1.7	44.1	22.0	30.5	0

■【Q2-1】報道を繰り返し見ていた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	2	3	11	41	1	1
構成比率	100.0	3.4	5.1	18.6	69.5	1.7	1.7

■【Q2-2】自分に何かできないか、悶々もん としていた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	4	7	19	24	4	1
構成比率	100.0	6.8	11.9	32.2	40.7	6.8	1.7

■【Q2-3】ショックで眠れなかった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	7	27	16	8	1	0
構成比率	100.0	11.9	45.8	27.1	13.6	1.7	0

■【Q2-5】本当に起こったのか現実感覚が混乱した <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	8	14	18	16	2	1
構成比率	100.0	13.6	23.7	30.5	27.1	3.4	1.7

■【Q2-6】なにかできることはないか、探した <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	3	17	24	12	2	1
構成比率	100.0	5.1	28.8	40.7	20.3	3.4	1.7

■【Q10-4】やりがいを感じた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	2	11	22	21	2	1
構成比率	100.0	3.4	18.6	37.3	35.6	3.4	1.7

■【Q10-5】地震・津波の威力を感じた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	1	8	11	35	3	1
構成比率	100.0	1.7	13.6	18.6	59.3	5.1	1.7

■【Q10-6】自分の無力を感じた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	4	13	21	16	4	1
構成比率	100.0	6.8	22.0	35.6	27.1	6.8	1.7

■【Q10-7】被災地の状況を把握することができた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	1	10	28	19	0	0
構成比率	100.0	1.7	16.9	47.5	32.2	0	0

■【Q10-8】共同作業の喜びを感じた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	191	8	26	69	76	6	6
構成比率	100.0	4.2	13.6	36.1	39.8	3.1	3.1

■【Q10-9】普段やったことのない仕事や作業をすることができた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	1	7	17	32	1	1
構成比率	100.0	1.7	11.9	28.8	54.2	1.7	1.7

■【Q12】別の災害ボランティアへの参加の有無 <SA>

	全　体	あ　る	な　い	無回答
調 査 数	59	8	51	0
構成比率	100.0	13.6	86.4	0

■【Q13】災害ボランティア以外のボランティア活動への参加の有無 <SA>

	全　体	あ　る	な　い	無回答
調 査 数	59	30	29	0
構成比率	100.0	50.8	49.2	0

■【Q14-2】同年代以外の人とも喋りやすくなった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	6	18	24	10	1	0
構成比率	100.0	10.2	30.5	40.7	16.9	1.7	0

■【Q14-5】働く場所として、民間ではなく、NPO活動にも興味を持つようになった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	11	20	19	7	1	1
構成比率	100.0	18.6	33.9	32.2	11.9	1.7	1.7

■【Q14-6】野田村のことをよく考えるようになった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	1	9	32	16	1	0
構成比率	100.0	1.7	15.3	54.2	27.1	1.7	0

■【Q14-7】行政の取り組みに関わるニュースを気に留めるようなった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	2	12	27	17	1	0
構成比率	100.0	3.4	20.3	45.8	28.8	1.7	0

■【Q14-8】節電や募金など、身近な協力を心がけるようになった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	2	8	27	19	2	0
構成比率	100.0	3.4	13.6	45.8	32.2	3.4	2.6

■【Q14-10】自分のできることについて、これまで気づかなかった「力」に気がついた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	6	18	24	8	2	1
構成比率	100.0	10.2	30.5	40.7	13.6	3.4	1.7

■【Q14-11】働くことや就職に関心を持つようになった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	4	23	21	10	0	1
構成比率	100.0	6.8	39.0	35.6	16.9	0	1.7

■【Q14-14】色々な人と働くことへの不安がかるくなった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	7	18	26	5	2	1
構成比率	100.0	11.9	30.5	44.1	8.5	3.4	1.7

■【Q15-1】地元に対する愛着が増えた <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	5	13	19	22	0	0
構成比率	100.0	8.5	22.0	32.2	37.3	0	0

■【Q15-2】地域の行事に関心を持つようなった <SA>

	全　体	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる	わからない	無回答
調 査 数	59	3	18	23	14	0	1
構成比率	100.0	5.1	30.5	39.0	23.7	0	1.7